

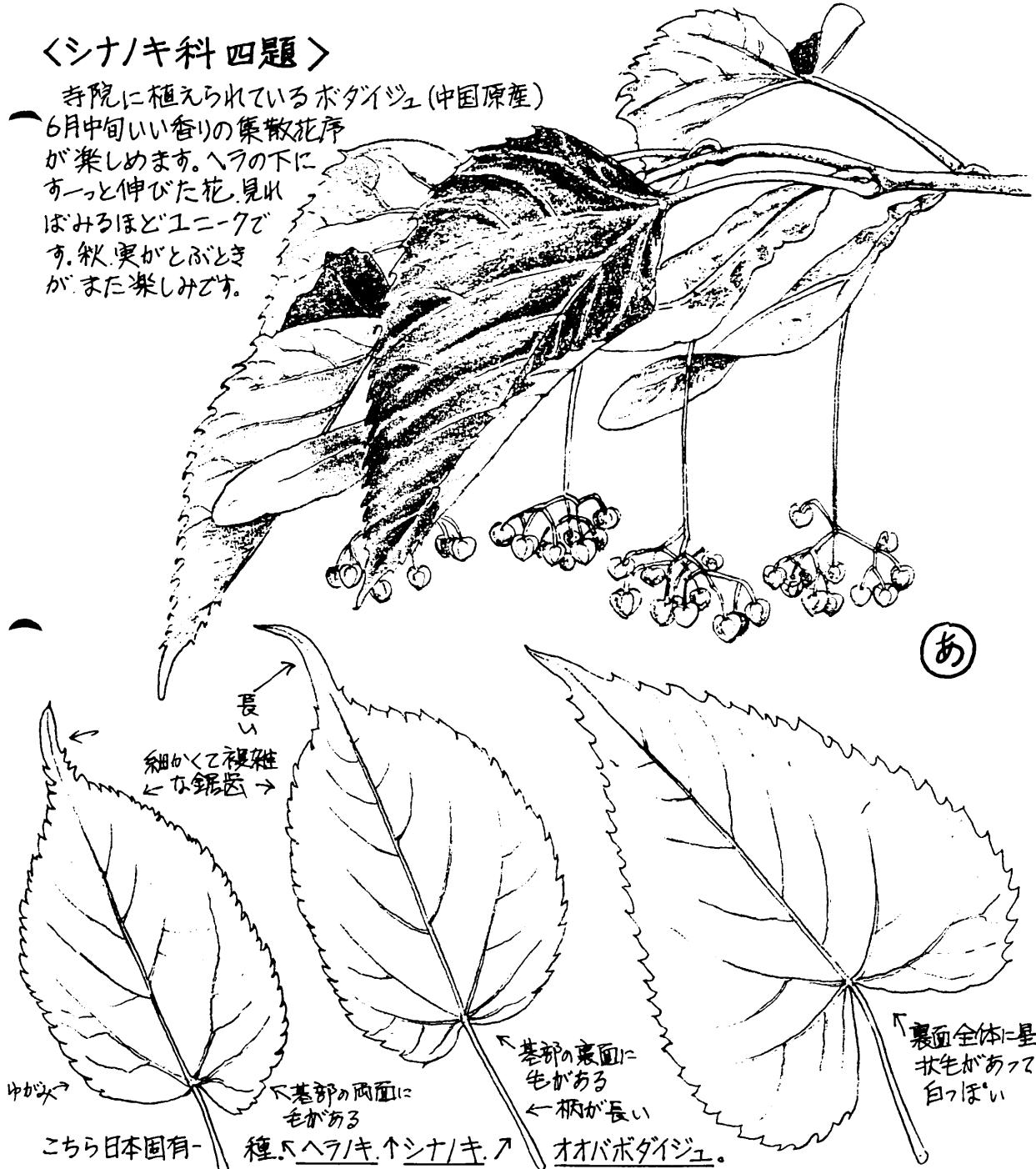
協議会ニュース

57号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1996. 6

〈シナノキ科四題〉

寺院に植えられているボダイジュ(中国原産)
6月中旬いい香りの集散花序
が楽しめます。ヘラの下に
すっと伸びた花見れ
ばみろほどユニークで
す。秋実がとぶとき
がまた楽しめます。



御 池 岳 遊 遊

相地 満 (風の会)

5月3日(金・祝)、コクルミ谷の入山届にメモを残した時刻は、もう10時を回っていた。昨夜9時30分過ぎに清水実さんからお電話をいただき、同行願えるということで喜びもひとしおであったのに到着時間が大幅に狂ってしまった。ただでさえ忙しい中を時間をさいてくださったのに私たちが遅れてしまった。よくみると博物館と翠嵐荘の話では、待っていたがいつまでたってもこないので先にもう山に入られたということであった。博物館の入り口の掲示板に「8時45分になったので先に出発します」と書き置きがしてあった。それから更に大あわてでコクルミ谷の入り口まできたのだが、待っていてくれたのはたくさんの入山者を乗せてきた長蛇をなす車の列であった。それにしても藤原岳周辺よりは遙かに少ない。とりあえず御池岳と白船峠の分岐まで急ぐことにする。どこかでいいらいらしながらきっと待っていてくれるはずだとという信頼感がさらに重い重圧となり続けていた。

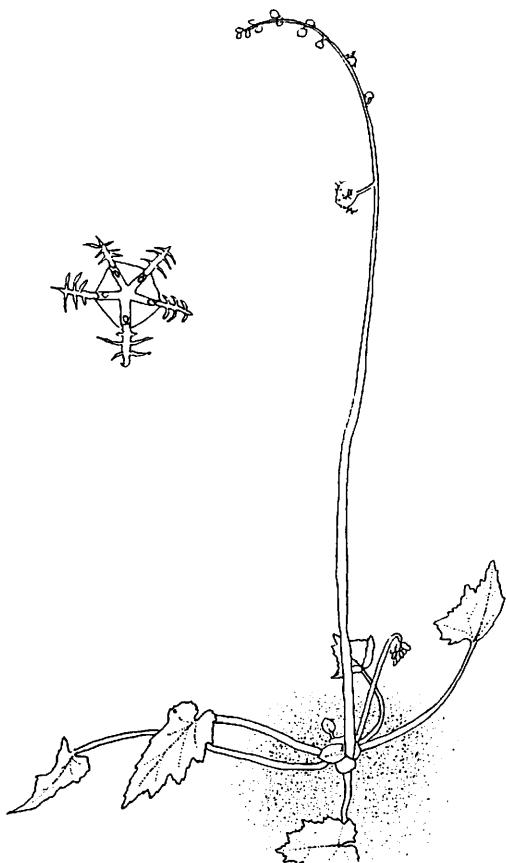
つい最近、発見されたという垂直な洞は、登山道の脇に不気味に、黒い口をあけていた。ケービングの人たちが調査に入ろうとしたがかなりの大穴らしく、しばらく様子をみてから時期をずらして本格的な調査をしようということになつたらしい。崖などにできる横穴の洞に対しでは快い好奇心をそそられるが、大地にあいた縦穴は危機感がともなう。そのため人を遠ざける。奈落の底に落ちるのをだれでも好まないからであろう。

このあたりまでギボウシの若々しい青葉やタチツボスミレが目だったが、イチリンソウに混じってキクザキイチリンソウがでてくる。このあたりの物は、みな白花である。この花の色は各地で変化に富むことが知られている。こ

の花をみるとたび、私はいつも能登半島の曾々木海岸の東にそそり立つ船山を思い出す。20数年前、船山に登ったとき、この花の青花をみた。史跡時間の横から林の中の道を通って登っていくと、たくさん咲いていた。土地の人はそれをホコペンチョと呼び、春が来た知らせと喜ぶ。変わった呼び名である。どういう意味があるのかわからぬままに、その地方の民俗誌などもいくつか聞いてみたが、未だにわからぬままになっている。だが、その呼称に対する興味以上に青く咲く花の美しいたずまいは、いつまでたっても脳裏に深く、強く焼き付いている。

鈴鹿や三河、木曽あたりで見るものよりも植物体自体がたおやかではあるが健康でしっかりしていたし、花弁もやや厚いのか、輪郭がくっきりしていたように思う。日本海が海岸の生き物に与える厳しさとやさしさにつつまれて、今、まさに落葉の下から芽を出し、春を告げようとしていたあの青く美しい花をもう一度見ることは、再びないであろう。余程私が趣味の世界に浸り込むことのできる余裕を持つことができぬ限り。頂上付近の岩場のくぼ地には、コイワザクラが満開であった。それらもまた船山に吹き付ける潮風を受けて小さく固まって咲いていた。しゃがみこんで見ている私に、「こんなところまできてとつていく人がいるんよ」と通りすがりの娘さんがささやいてくれた。さもありなん、そのころから今の山野草ブームは、始まっているのだ。おそらく今その地に立てば、あの日当たりのいい岩影に強風をかけて楽しそうに咲いていたコイワザクラの群れはもう無いであろう。山野草マニアの収集熱とそれをあたりたてる業者の企てはすさまじい。すばやく何もかもわれ先にと根絶やしにしていく。開発という大きなプロジェクトが巨大な力で有無をいわせ、彼

らいたいけな罪のない植物たちの生息地を搔き消していくのに対し、山野草収集家と業者は、いわばどこにでも入り込んでいく草の根の自然破壊者の役割を見事に果たしている。今絶滅を危惧されている植物の相当数が園芸目的による採取に起因していることが、抜き差しならない大きな事実として我々の前に明らかにされているのだ。たとえ保護地であろうと入山不可能に近い地であろうと彼らにとってはお構いがない。見つかりさえしなければ良いのである。私有地のみならず人の畠や庭の中のものまでも根こそぎ堀り採っていく。



チャルメルソウ（ゆきのした科）

（96. 4. 30 長井坂）

岡田慶範

長命水の辺りまでくればバイケイソウの緑の葉が美しい。またコバイモも一輪二輪と数は少いが咲いている。これもまた数を減らしてしまった植物である。長命水という名の水場は至る所にある。藤原岳の登山道にもある。水の味といえばやはりそこここで違う。私も奥伊吹・養老・木曽・北鈴鹿などの味の違いは分かるようになつた。だがどう言葉で表現したら良いかが分からない。とにかく違うし区別することもできる。味覚は味覚・触覚とならんで記憶として長期保存される。本人には分かるのだがそれをどう他人に伝えるかができない。結局はそれが自分で体験するしかないということなのかも知れない。カタクリ・チャルメルソウ・アズマイチゲなどを見ながら御池岳の分岐にでる。清水さんは前日おっしゃってみえた予定通り、ここから白船・天狗岩・藤原岳を通って聖宝寺へ抜ける道を歩いておられるだろう。時間が大幅に遅れてしまいもう追いつく可能性に乏しいこと、同行者の体調がけして良くないことも考えて後髪を引かれる思いであったが、まず御池（丸山）へ登りそれから様子をみて考えることにした。

真の谷から丸山へ急登するあたりの手前で、冬眠から目覚めたばかりのナガレヒキガエルにであった。

ナガレヒキガエルが種として認められたのはそう古いことではない。平地に普通に見られる止水性のヒキガエルには、アズマヒキガエルとニホンヒキガエルがいることはよく知られていた。それらは緯度の違いによる地理的な分布境界線をもっていたが、垂直分布の上で山地渓流に住むヒキガエルがいることも以前から知られていた。それがニホンヒキガエルに属するのか、アズマヒキガエルに属するのかは定かではなかった。雪どけの水たまりや渓流を選ぶ産卵特性と幼生の生活史などから別種として扱われるようになつたのである。少し山を歩いている人ならこんな処にヒキガエルのオタマジャクシがと思われる場面が幾度か見られたことであろう。

ナガレヒキガエルを軽くつかみ裏返すとクーカーと良くなく。ややタゴガエルににた感じであるがグルルルと少し濁った音が混じり、やさしく可愛らしい鳴き声である。なんともはや愛らしい、色も形もなかなかにダンディな蛙である。

昨夜の清水さんの話だと今年は雪が遅くまであり、昨日も夕刻まで雨が降っていて悪天候であったという。おそらく今日は朝から晴れて、数日続いた雨に雪もとけ、気温も上がったために冬眠からでてきたばかりといったところではないだろうか。

ナガレヒキガエルの頭に残雪を乗せ、別れを告げた。谷に積もった雪の斜面を急登する。芽出したばかりのバイケイソウがたくさんの登山者のために踏みしだかれて痛々しい。とけたばかりの雪の下に埋まっていたものは黄色っぽく福寿草と見間違えるほどの大きさでもある。雪どけの水を吸い上げ、見る見る大きくなっていくようなバイケイソウの葉脈が描く曲線が快くくっきりとしている。

丸山の頂上は、ちょうど昼食時期でもありたくさんの人でごったがえしていた。早々にきり上げ真の谷へ向かう。

ここでは人一人しかすれ違うことは無かった。静かでやさしい早春の北鈴鹿の谷がここにあった。盗掘のため、今は鈴鹿から消えてしまったかのようなコタニワタリの健全な株もこの谷筋にはあった。若いものから少し古い株まで苔むした岩肌に少し間隔を起きながら並んで生えていたのが印象的であった。また、涸れ沢にも雪どけの水が集まり、湧きだして細流となる辺りにはヤマエンゴサクの薄紫の花が美しかった。この谷は北鈴鹿では良く知られた谷なのだが比較的人の出入りが少なく植物への踏み付けも少ないようでエンレイソウなどの姿も美しかった。

真の谷のテントサイトから尾根に登る道の脇にはカタクリの花が美しかった。その影に隠れて幾つかのスミレの仲間もあった。中には1.5cmにも満たない草丈に精一杯大きな花を咲か

せているものもあった。ざっと見ただけでもこの道の脇に5種はあった。この時期、じっくりとスミレの仲間調べをするのによい道である。来年ぜひやってみたいことである。またこの道もさほど人が通らないためかバイケイソウの踏み付けによる痛みも少ない。その造形的な筋の美しさがきわどく見えた。エンレイソウの赤紫とも黒とも付かぬ渋い色にも様々あり、一つ一つが見ごたえのあるものであった。

カタクリの中で

は白船のカタクリの群落が一番咲き揃っていたようである。あとは全ての行程中どこででも出でていたがまだ咲き揃うにはこれからといった感じであった。白船か

らコクルミ谷への分岐にいたる尾根道で咲きだしたばかりのイワウチワに出会った。これは実際に見事であった。悪天候が晴れてまさに今花開いたといった新鮮な雰囲気で咲き揃っていた。ピンクのものもあり白いものもあった。それらが一群れずつ柔らかな谷風を受けて咲いている姿は印象的であり、平和な姿であった。これらスプリング・エフェメラルの花期は短い。今だ芽出し前の雑木林の下にある一瞬の春を惜しみ、かいまみながらコクルミ谷を急いで下り始めたのは4時28分のことであった。

それにしても凄い入山者の数である。御池はともかく藤原だけでも数百単位の人が連日押し寄せるという。一体この連休中にどれだけの人がこの北鈴鹿に入ったのだろうか。せっ



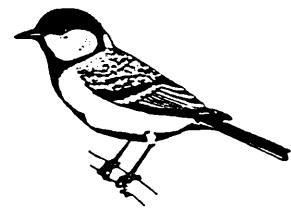
かくいい福寿草の群落を教えてやっても、教えた後またたく間に踏み荒されて、さんさんたる物になるという。それを知ったものが得意がり、にわかにリーダー性を發揮して、何人の人を連れ、数日をあけずして再びその地を訪れ、踏みだしていくのである。山野草趣味の盗掘もこれだけ荒らされた今では、やはり少し心苦しく、後ろめたいものを感じるのだろうか。最近では採るよりも撮ることの方に重きが置かれているという。これなら罪悪感も無く、大手をふって歩ける。しかし、斜面に咲いたイワウチワの花を撮ろうとして、コバイモの花を踏み付けているのを見ると、何だこいつらも結局みんなおなじじゃないかと思ってしまう。中にはわざわざ堀り採って、都合のよい場所に植え替えて撮っていくものもあるという。しかもしやがみこんでアズマイチゲのごく小さいタイプのものを不思議そうにみている私に「セツブンソウですね」とわざわざ教えてくれるのだからたまらない。自然にひかれるとかやさしいとか親切とかいうのはどういうことなのだろうか。西野尻や西藤原に群がる人々の集まりや登山口に殺到して、延々と続く車の量をみていると山の悲鳴が聞こえてくるようだ。まさに恐ろしいものこそ人であることを実感する。100人の人が糞をすれば何kgの糞の山ができるであろうか。同時に100人の人が踏み歩けば、落葉の下の小さな花々の群落などまたたく間に搔き消されてしまう。何とか自然とのつき合いを、マナーを守りたいものである。そのためには、まずやたらと道を踏み外さないことである。道なき道を行くのは楽しいことである。確かにこの時期の北鈴鹿の樹林はいつになく見通しが良く、どこでも通れるようなやさしさに満ちている。しかし、道を誤ってはいけない。一步誤ればどうなっているか、一步先が初心者には予測の付かないのが山である。どうにもならないがれ場や崖の上に出てしまうということが良くある。道はまた、その山において、そこしか通れない、あるいは通ってはいけないからできているとい

っても良い。登山道をやたら踏み外してはいけない。そういう気持ちになったとき、山の自然はやさしく私たちを迎え入れ、包み込んでくれるであろう。おそらく今日は、この連休中にも最高の人が入ったであろう北鈴鹿ではあったが、にもかかわらず比較的静かな山旅ができたのは、コース選びと少し遅い時刻に入ったためだったかも知れない。

今朝、展開しかけたばかりのような草花の葉や花弁が一息ついてほっと和むかのような夕刻間近に山を降りることができたのは無上の幸せであった。

翠嵐荘によると、つい先ごろまで清水さんがみえていたという。またまたのすれ違いである。そこで夜、電話をいただいた。土倉のブナ林が良いという。ぜひでかけたいものである。

1996. 5. 4 (土・祝) 記



会員の動き

【住所変更】

- ・長谷川信吾（尾張支部）
〒465 名古屋市名東区丁田町 58
コーポ青雲 302
(☎ 052-777-9787)
- ・星野 博（尾張支部）
〒492 稲沢市稲葉 3-6-16
(☎ 0587-34-1800)
- ・水嶋俊司（西三河支部）
〒470-11 豊明市栄町上姥子 6-65
エスポア豊明 503
(☎ 0562-97-9140)

いじめに対する提言

環境教育ネット東海事務局 山田博一

日教組の全国教研で、いじめ問題が真剣に取り上げられ、議論も多くなされ、教師の反省が強く打ち出された。しかし、多様なタイプの生徒を扱い、何かあると、事前・事後指導や会議に追われ、多忙をきわめ、ゆとりのない状況の教育現場で対応に追われる教師に、いじめ問題を環境教育からサポートできないか考えてみた。

8 8 8 8

いじめ対策のソフトの面では、家庭・地域との連携、教員側の積極的取り組みや研修、さらには専門のカウンセラーの配置が次々に打ち出され実行にうつされている。しかし、ハード面の対策はまだ立ち遅れている。中学校から高等学校に進むにしたがって、無味乾燥で、ただ生徒を管理し、収容するだけのコンクリートの校舎と運動場が多い。

単調で自然に乏しい環境で遊んでいた児童の大半は、人間関係がぎすぎしたものになってしまることが知られている。逆に、本物の自然に触れ、その中で活動して鍛えられた者は、暖かい心を持ち、あらゆる逆境に耐え、大学受験では土壇場で意外な馬鹿力を発揮して成功しているのを私自身の教職体験で何度も見ていている。

ロビン・ムーア氏は、「外なる自然」＝「生徒の心」を別の次元でとらえてはならないと市適している。だから、いじめ対策として、専門のカウンセラー配置や地域との連携などに加えて、上の学年でも学校環境に生命活動の息吹きを与える、辛い時は、心の支えとなる環境を学校が提供することも必要ではないかと考える。

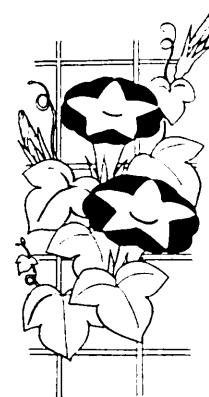
現在、高等学校の教育現場から、小学校・中学校のいじめを生き抜いて大きくなった生徒を多数知っている。また、私自身もいじめられたものとして、今現在教壇に立ち、環境教育に携

わるものとして、次の提言をしたい。

1 校庭は単に運動するだけの場所ではない。児童・生徒が生活する学校教育の場である。生命と共に存する最初の場であり、生命の尊さを学ぶ場である。教師だけが先生ではないのである。そのためには、高学年でも、豊かな自然に接することができるようにする必要がある。具体的には、次のような改善ができる。

①生け垣

単なる植栽ではなくイギリスのカントリーヘッジのように、四季を感じ、動植物の生命活動の場を提供するバイオームとする。



②シンボルツリー

ただ植栽や木陰を提供するだけでなく、見ただけで樹木の生命とその尊さを心に刻み、力強さを学ぶ象徴を育てる。



2 校舎を、コンクリートの建物と運動場という規格品に統一して、大量生産する教育工場という高度経済成長の遺物から、木造校舎やその他のアイディアでぬくもりと安らぎを持たせ、効率優先から、ゆとりと希望の場に変えていく必要がある。

3 いじめは根絶ではなく、どうしようもない暴走を防ぎ、いじめと共に成長して、最終的になくすることをしたい。そのためには、核家族化が進行し、異年齢集団が成り立たない子供社会や、習いごとに追いまくられて子供同士が交流ができない中で、子供同士で一線を越えないルール作りをする必要がある。そのために、ボーイスカウト・ガールスカウトなど自然に触れながら活動する緑の社会や、スポーツ少年団などのルールのある活動を振興する必要がある。

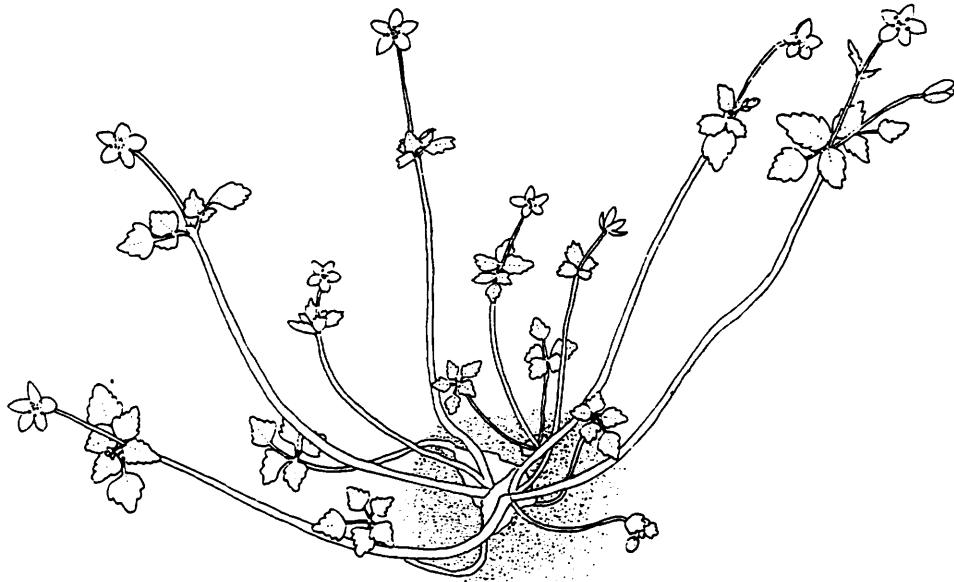
4 子供同士のわざらわしい付き合いが必要である。以前、宮本憲一氏が自然を守るには、「自然とのわざらわしい付き合い」が必要だと説いたが、いじめ問題でも同じことが言える。塾通い・テレビやテレビゲームだけの世界でなく、地域での活動などで、子供同士が、喜怒哀楽をめんどうでも共にする必要がある。

われわれ大人が子供の頃、浴びるほど享受できた自然、それが今、すべての子供には与えられていない状況にある。かえがえのない自然が失われ（外なる自然が失われ）そのため子供の感性が失われ（内なる自然が失われ）ている。それに加えて、ファミコンで、自分の不都合な者を、簡単に消し去る「ポア」の思想の積み重ねは、児童・生徒の心を荒廃させる。このような感性の危機に対する環境教育の果たす役割は大きいと考える。

トウゴクサバノオ（きんぼうげ科）

（96.4.28 長井坂）

岡田慶範



定例観察会

森林公園観察会

鬼頭 弘 (尾張支部)

第1回は尾張支部の2月・月例観察会として1994年2月13日(日)に行いました。翌3月から第一日曜日を定例として現在に至っています。

早いもので今年の2月でまる2年を迎えました。始めた頃は自信がなく続けていけるのか不安っていましたが、毎月歩きだすと何かしら発見があって楽しく続けてこられました。観察したいのもが出てくると、月に何度も足を運んだこともあります。普段見られない生き物との始めての出会いは感動的なものです。

それまであちこちの観察会に参加してきましたが、言ってみれば聞き役でした。自分のペースで自然の声を聞いたり調べたりすることはなかなかできなかったと思います。観察会を始めてからは、それまでより多少とも密度の濃い自然との出会いがあったように思います。また、観察会を通していろいろ人と会えることも楽しみの一つになっています。

最初は観察会をとにかく始めてみようということで始めたのですが、フィールドの様子が分かってきて気持ちにゆとりが出てきたころ、自然観察会として一般の人の参加を意識して呼びかけるようになりました。現在の参加者は指導員と一般の人が4対1くらいです。チラシを森林公園の案内所に置いておくと、日に1枚くらいのペースでもらわれていきますが、一般の参加者がなかなか増えません。

今年の2月11日に森林公園協会の主催したネイチャーラリーのお手伝いをしました。いくつかのポイントを決めて参加者の方に自分なりの観察をしてもらうというものです。35組(100人くらい)の参加者があり、ポイントでの語りかけや解説を興味深く聞いていたいたり、言葉のやりとりをしたりすることができます。自然に興味を持つ人がいて、これだけの人が森林公園に集まってくるのですから、参加しやすい観察会を考えることが必要だと思うところです。



エイザンスミレ (すみれ科)

(96.4.16 田津原)

岡田慶範

大高緑地自然観察会

篠田 陽作（名古屋支部）

大高緑地は名古屋市の南東の端の緑区の南の端に位置する県営の緑地公園です。すぐ隣は東海市です。緑地公園とは言うものの、大高交通公園としての名前の示す通りあまり自然には恵まれているとは言えません。

さて、大高自然観察会始めたのは、観察会をするためではなくて、観察会のノウハウや、指導員の育成のためのデータを集めるための実験プラントとしての目的で始めた観察会です。つまり、この観察会は最近大企業がよく行っているアンテナショップ、これから商品開発や顧客のニーズなどを調査するための直営実験店と同じ目的です。ここで行ってみたかった目的はおおよそ次のようなものです。

No. 1 每月定例の観察会を行うとき、どのような立地条件の所が良いか、これには多様な要素があります。①良好な自然がある所、②普通の自然がある所、③貴重な自然がある所、A交通の便利な所、B交通の不便な所、今回は②とAを選んで大高緑地にしました。

No. 2 指導員を育てるための観察会はどのようにすれば良いか。

指導員の資格は取ったけれども実際の活動がなかなかできない指導員が多い。これを解決するために気軽に参加して、学ぶことができるトレーニンググランドとしての観察会としての役割。現実に尾張支部、知多支部、名古屋支部などからの見学や参加があります。

No. 3 観察会での指導方法の改良や研究を行なうためのテストの場としての観察会が必要であると考えた。まだ始めて三年目ではあるが、大高方式とも呼べれるものが少しづつ生まれてきています。

No. 4 新しい観察会の実験の場としての役割。

これは昨年大高で二回行われた身体に障害のある方のための観察会などです。これからも眼の不自由な方、聴力に障害のある方、お年寄りで歩行困難な方など、いろいろとチャレンジし

ていきたいと思っています。

No. 5 地域の住民の方々に認知された観察会を行なうための活動方法、組織づくりと、などを実践するための観察会。

No. 6 同じ場所で毎月行なう観察会での参加者の確保と動員の方法の確立をするための方法をみつけるため。

まだ、この他にもいろいろトライしたい事は沢山ありますが、始めてから丸二年、やっと三年目に入ったばかりでは、なかなか思うように活動できません。

このように、大高緑地自然観察会は多くの問題を抱えながら今年も頑張っています。

以上六つの試みは、場所の選定については心配したほどのこともなく、No. 2, 3, 4、もう少し時間がたたないと結論はでないと思われます。

No. 5の住民参加については、地元に大高緑地を愛する会ができて年に2~3回共催で観察会や春祭り、緑地の清掃奉仕などを行い、充分に目的を達成しています。また、参加者の動員についても一年目は約300名、二年目は600名と順調に伸びています。発行物については、岩崎さんが観察会の報告書を作成され、それとは別に参加者向け『ワンダーランド大高』を発行しています。そして一年間の観察会のテーマ参加者数、観察した植物、鳥などのリストを載せた20ページほどの年報を発行しています。これも代表の岩崎昇一さん、石原洋一さん始め、多くのスタッフの皆さんのがたまものかと思います。ぜひ指導員の皆さん、大高へ遊びに来て下さい。そして、我々のチャレンジを応援して下さい。

現在の大高自然観察会のスタッフです。

代表 岩崎昇一、石原洋一、浅越陽子、山田千宏、近藤盛英、篠田陽作

大高自然観察会は、毎月第二日曜日9時30分集合、第一駐車場売店前。

岩倉市自然生態園-その後のトンボ池

齋竹善行（尾張支部）

「協議会ニュース」49号で岩倉のトンボ池を紹介しましたが、その後、岩倉市がここをビオトープの考え方を取り入れた公園として整備し、この4月に「自然生態園」という名称でオープンしました新聞で報道されたことから、ご存じの方も多いかと思いますが、改めてその施設を紹介します。

地元住民や自然愛好家が、平成5年に自分たちで池を掘ってから、周辺で20数種のトンボが確認され、市民に「トンボ池」と呼ばれ親しまれています。私たちが、ここは市内で最も自然が残っている津島神社の森と一体のものとして、この地域に昔からあった草木や小動物などの自然を復元することが重要であると訴えたところ、地元にも市にもほぼ受け入れられ、市が従来の都市公園とは違った概念の公園として整備することとなりました。そのため、市は静岡大学の杉山恵一教授のアドバイスを受け、ビオトープの考え方を取り入れてトンボ池の拡張整備を行いました。

自然生態園の面積は5,573平方メートルで、隣接する津島神社の敷地1,561平方メートルと合せても広いとはいえないが、いろいろな生物が生息できるようにするために、地下水を利用した池と流れのまわりに水草を植えたほか、コウモリのねぐらとなる木製タワー、カブトムシなどの昆虫のための堆肥やほだ木置き場、草屋根の小屋など施設について工夫がなされています。

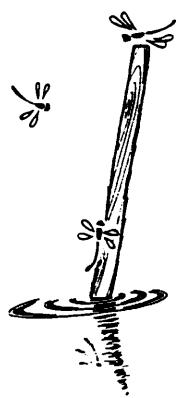
従来、公園は完成すればゴールということでしたが、ここは施設の完成が身近な自然の復元を図るための出発点であり、池や動植物の管理をはじめとするこれからの運営が重要です。そのため、市も、施設の設計の段階から、地元住民と静岡大学のビオトープを観察したことはじめ、市民の意見を聞いたり、植栽工事に市民の参加を求めたりしてきました。私たち岩倉ナチュラリストクラブも自然を愛好する市民団体として積極的に運営に参加していきたいと考えています。



なお、ここのワークハウスには、4月から10月までの土曜・日曜と祝日には午前10時から午後3時まで案内人が詰めています。もの珍しさも手伝って、施設ができて以来、日曜などには多くの見学者が訪れています。希少な動植物がいるわけではありませんが、身近な自然とのふれあいのための施設の一例として、皆さんも一度ご覧になって、ご感想・ご意見をお寄せください。

【施設の概要】

- 1 名称 岩倉市自然生態園ーたんぼの国のとんぼの郷
- 2 所在地 愛知県岩倉市北島町最中1257-1
- 3 事業経過
 - 平成5年度 基本設計
 - 平成6 年度 実施設計、用地取得
 - 平成7 年度 整備工事
- 4 事業費 設計関係 13百万円
用地取得 308百万円
工事費 94百万円
- 5 問合せ先 岩倉市役所商 工農政課
電話0587-66-1111 内線 263



会員紹介

わくわく観察会

近藤記巳子（名古屋支部）

①資格取得：H5年秋 ②所属：名古屋支部
③フィールド：相生山緑地（天白区野並）
④観察会について：身近な自然を「丹念」に観察することにこだわって活動。自然のしきみの巧妙さ、造形美に接すると、身近な自然もたちまち神秘の世界となる。

めざすは、どきどき、わくわくの観察会。
⑤現在の関心：昨年、定例観察会としては初のナイト・ウォッチングを実施。今年も8月に予定。相生山緑地自然観察会の夏の定番としたい。

⑥植物に関する記憶 ヘビイチゴの巻

小学2～3年生の頃、ヘビイチゴの砂糖細工のような赤いみに魅了される。友だちは「ヘビの食べるものだから、ダメ」「きっと毒があるよ。死んじゃうよ」等々。しかし、どうしてもその実を食べたい。生死をかけて（？）口にする。水っぽい。酸味も甘味もない。もちろん、やっぱり毒がある、と苦しむこともない。いささか拍子抜けし、かじったヘビイチゴのまっ白な断面を見つめていたことを、今も鮮明に思い出す。

その後、佐藤達夫氏（エッセイスト）の著書のなかで、ヘビイチゴの実の美しさを賛え、食べてはみたいが・・・と不安な表情をのぞかせた文章に出会う。私は、思わず「勝った」とつぶやいた。植物をいとおしむ文を書かれる佐藤氏だが、「食べてしまいたいほどかわいい」という思いは、私の方が勝っている——と、勝手な勝負をして喜んだ。

5年ほど前、ヘビイチゴを果実酒とすることを思いついた。1年ほど寝かせてたら、なかなかの美酒となった。

自然観察は、五感を働かせてと言うが、私は「味う」感覚を最も働かせている指導員かもしれない。

会員紹介

春のスケッチ

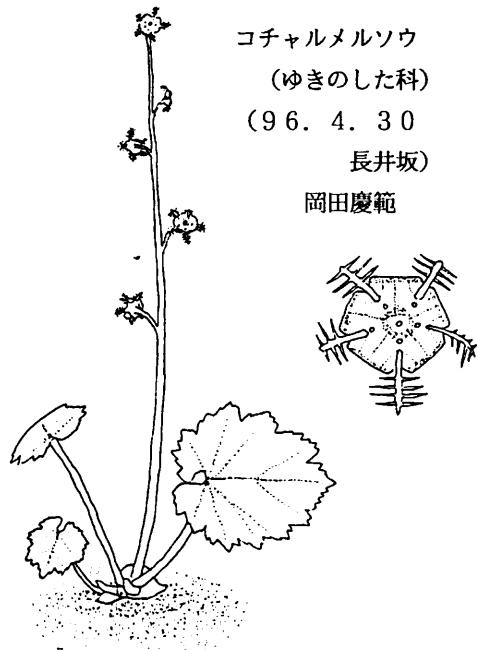
岡田慶範（西三河支部）

今は春まっ盛り。山の中はようやくソメイヨシノが散り、カスミザクラなどが満開になりました（今日は5月1日）。

朝、仕事場へ行く前に、どんな花が咲いているか楽しみに歩いています。ハナネコノメ、ミヤマネコノメソウ、チャルメルソウ、コチャルメルソウ、シロバナガバノスマレサイシン、トウゴクサバリオ、エイザンスマレ（香りあり）、マルバスミレ、マキノスマレ・・・。これから咲きそうなコケイラン、エンレイソウ、ミヤマヨメナ、ヒロハコンロンソウ・・・。

仕事の合間をぬって絵にしていますが時間が足りません。来年3月には、まとめて冊子として出す予定です（要予約）。

それから、地衣類の名前が分からず困っています。よい図鑑があったらお知らせください。



コチャルメルソウ
(ゆきのした科)
(96.4.30)
長井坂
岡田慶範

すばらしい海

中井康夫（知多支部）

「ひょっとして今流されて行ったものは？」と、網でくわおうとする。アメフラシのなかまらしこが、目の前に見えていながら、流れに沿って行ったり来たり——。体を丸くしてよく流され、運ばれること！やっとのことでつかまる。調べてみると、クロヘリアアメフラシだった。あの紫色の汁を出すアメフラシと比べると、ずっとかわいくて上品な感じがする。

こんなことがあったのは、もう何年か前。それから何回海へ行ったことだろう。春や夏だけではなく、回数は減るにしても、秋や冬にも行った。海へ行って、かぜをひくこともあったが、だんだん海との付き合い方が自分ながら上手になった。自分が夢中であったから風の強い日も小雨の日にも出掛けられた。打ち上げられているものだけを拾って帰った日もあった。だから、しぜんと貝の種類もたくさん集まった。そして、貝だけでもこんなにいるのだということに驚かされた。それに加えて、まだいろんな生き物たちがいることを考えると——どれだけ海は育む力があるのかと、いつも偉大を感じるのである。

ウミフクロウの産卵、ヤマトウミウシの交尾、クロシタナシウミウシやマダラウミウシやミヤコウミウシやメリベウミウシにも運が良ければ出会える。うっかりすると、中には見逃すかもしれないが、それを見つけて、水を浸した入れ物に置いて見てみよう。感動するに違いない。はっきりとした体型をあらわすから。

そんな海で今年も、県委託の「磯の生物」の観察会が行われる。楽しみである。

尾張支部主催 藤原岳花登山

日時：1996年4月29日（みどりの日）

場所：三重県員弁郡藤原町

〈楽しくて、ちょっと疲れた一日〉

瀬戸出発組は、市役所発7:01の地下鉄に乗り遅れ、近鉄急行に滑り込みセーフで立ちん坊。三岐鉄道も立ちん坊。途中、三岐鉄道の電車から、藤原岳の谷筋に残雪が見える。

9:00 西藤原駅前に集合した参加者は57名。

坂本谷への山麓まではイチリンソウ・テンナシショウspが咲き、ハクサンハタザオも満開。花暦は1週間以上遅れ、ヤマブキソウは2花のみ。オドリコソウもつぼみばかり。ネコノメソウ類（ハナネコ・ヨゴレネコ・ヤマネコ）が開花。みんなの疲れがピークに達した頃、エイザンスミレが美しい花で出迎えてくれた。アズマイチゲ甘い臭いがしたとか……

尾根に出るとカタクリが少し花、今年は極端に花が小さい。そして、ついに雪が登場、美味。そのせいで、驚いた事にスハマソウ・セリバオウレンがまだ花。最後の急坂を登りきり、白瀬峠に着いたのは12:25。最後尾のグループが着いたのは12:50過ぎ。

先発隊は、13:00に出発。バイカオウレン1花のみ発見。所々、残雪を踏みながら日本庭園へ。フクジュソウが満開で、素晴らしい景色。コバイモ・ヒロハアマナも咲き始めの美しさ。そして、キバ



花の真ん中の
紫色が美しい



いつも人気がある
コバイモ

ナノアマナが一株、パッチリ2花を開花。Anemon属では、アズマイチゲが真盛りで、花の芯にある紫色が大好評となる。全体的に、花暦は10日以上遅れている。2:40に避難小屋につき大休憩。「好きな花ベスト3」を書いて下山を始める。

カタクリは超小型の花ばかりで、昨年の夏の厳しさを感じさせる。8合目ではハルトラノオ、杉林下ではセントウソウと常連が加わる。大貝戸道ではミヤマカタバミが満開で、3合目ではエイザンスミレ・イカリソウも数多く咲き、例年とは違った花を最後まで楽しむことができた。駅には4:20到着で、結局いつものペース。

冬の多雪による花期の遅れで、フクジュソウ以外は花が少なめ！というが、今年の印象。

（文責；北岡明彦）

《みんなの「好きな花BEST3」投票結果》

① フクジュソウ	22票
② アズマイチゲ	17票
③ コバイモ	16票
④ カタクリ	8票
エイザンスミレ	
⑥ キバナアマナ	6票
⑦ ヒロハアマナ	4票
⑧ アマナ（類）	3票
イチリンソウ	
キクザキイチゲ	
⑪ ヒトリシカ・カスミソウ・ツルカノソウ・ヤマエンゴサク・ネコノソウ・ニリソウ・セツブンソウ・イヌナ・ヨゴレネコノ・ヤマネコノ	2票
⑫ ハナネコノ・マルノミルシ・エンレイソウ・バイケイソウ・レンブクソウ・トウゴクサバノオ	1票
三名連記投票総数	38名

活動予定 7月

- 7 (日) 9:30 大森-----
 13:30 (協) 基礎研修会—ゴミ（廃棄物）の現状<中小企業センター>
- 14 (日) 9:30 大高緑地-----
 10:00 岳見高原-----
- 17 (水) 18:30 室内例会<2研>— (未定)
- 27 (土) 10:00 青少年公園-----
 19:00 相生山緑地----- (スター・ウォッチング)
- 28 (日) 8:00 熱田の森-----

自然観察会連絡先

(1996.6現在)

『愛知県自然観察指導員連絡協議会』名古屋支部後援の観察会を毎月開催しています。リーダー等の都合により開催日が変更の場合もあります。参加の際は、念の為、開催日・集合場所・時間等 各連絡先へ問い合わせをお願いします。

開催日	名称（活動場所）	リーダー氏名	連絡先
第一日曜日	大森観察会 (守山区)	塙本 和義	052-991-2668
		加藤 純子	052-711-2469
第二土曜日	猪高緑地 (名東区)	堀田 守	052-774-1196
		布目 均	052-771-0396
第二日曜日	大高緑地 (緑区)	篠田 陽作	052-881-4741
		岩崎 昇一	0533-68-0201
		山田 千尋	0562-97-6857
第二日曜日	岳見高原 (岐阜瑞浪市)	鈴木 武	052-821-6794
		南 謙三	052-761-8397
第三日曜日	東山自然観察会 (千種区)	武田 篤	0564-21-4405
		鈴木 見子	052-834-2094
第四土曜日	愛知青少年公園 (長久手町)	鈴木 武	052-821-6794
		南 謙三	052-761-8397
第四日曜日	熱田の森 (熱田区)	鈴木 武	052-821-6794
		南 謙三	052-761-8397
第四日曜日	相生山緑地 (天白区)	近藤 記巳子	052-822-7460
		鈴木 ひろ子	052-822-3484

奥三河支部会員の皆様へのお知らせ

平成8年度支部総会（2月11日）、県連絡協議会総会（3月24日）も無事終了し、本年度事業も本格的にスタートいたしました。

奥三河支部といたしましては、支部総会でご決定いただきましたが、本年7月以降の事業は次のとおりですので宜しくご協力下さいます様お願いします。

・ふるさと自然観察会（県委託）

開催日時 7月28日（日）

10:15～14:30

開催場所 天竜川（佐久間ダム下流）

集合場所 JR中部天竜駅

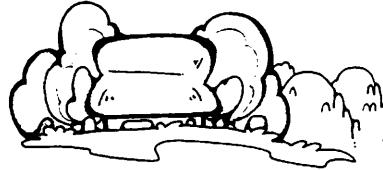
※下見会 7月7日（日） 同上時間集合

・支部研修会及び総会

平成9年1月下旬を予定していますが詳細については後日連絡します。

なお、本年4月から「協議会ニュース」に支部だよりコーナーが設けられましたので、会員への連絡事項、お知らせ等ございましたら、遠慮なく記事をおよせ下さい。

支部編集担当 石川



事務局から

〔行事結果〕

☆ 基礎研修会「シダ植物の観察」

〔期日〕平成8年6月3日（出席7名）

〔場所〕定光寺 〔講師〕村瀬正成

どうしても苦手となりやすいシダ植物の研修会で、実施後に振り返ってみても、やはりシダは、わかりにくいという感じが残りました。しかし、雑種が多いなどの難しさはあっても、慣れればある程度判断できますし、その美しさも感じるようになると思われました。当日は、定光寺の参道入口から御手洗川遊歩道を往復しましたが、その間に見られたシダは、次のようでした。

トラノオシダ・ベニシダ・オオベニシダ・マルバベニシダ・エンシュウベニシダ・キノクニベニシダ・トウゴクベニシダ・テリハヤブソテツ・ナガバヤブソテツ・キヤマヤブソテツ・キジノオシダ・オオキジノオシダ・マメヅタ・ヒトツバ・ウラジロ・コシダ・シシガシラ・コバノイシカグマ・ナンゴクナライシダ・ハリガネワラビ・クマワラビ・オオカナワラビ・アイアスカイノデ・ヌカイタチシダモドキ・ヌリトラノオ・イノモトソウ・コウヤコケシノブ・ヤラシダ

〔自然観察会の記録〕

自然観察会は、一般の人々に自然に親しみ、その大きさを知りたいなどです。そのため、楽しくいろいろなものが観察できればそれで目的は十分達しています。けれども月例観察会等では、常に同じ場所を観察しているためその状況をうまく整理しておけば、将来貴重な記録となるでしょうし、一回だけの観察会でも記録を残すことで何かの役に立つことが考えられます。

今の実施記録は、どちらかと言えば感想的なものが多く、主な観察事項とか参加者の反応などが書かれています。また、指導方法の内容や反省点などを書く場合もあります。それでも、観察会の今後の運営などには役立つでしょうが、さらに欲を出して、地域の自然の状況等を記録に残すにはどうしたらよいかは、今後の検討課題の一つと思われます。探鳥会では、最後に当日見られた鳥の名前を確認し合うことが定例化しています。これについての是非がありますが、長く続けば将来の良い資料になるでしょう。自然観察会の場合は分野が広すぎて、何を記録したらよいのか迷います。例え分野を限っても、観察したこと全て記録するのは大変です。

記録の方法のいくつかをいくつか上げてみると、一つはその時のテーマとなったものはなるべく詳しく記録するもので、種名だけでなく数量や分布なども記録するようになります。また、その地域に特徴的なもの、例えばトウキョウサンショウウオなど貴重なものとか、良好なカシ林がある場合は、その状況を常に意識して、記録しておくこともあるでしょう。その他にもいろいろなやり方があるでしょう。

要は、その地域の特徴を把握して、それに合った記録の仕方が大切と思われます。

会員の皆さんもこうした点に工夫してみてはいかがでしょうか。

〔協議会の性格と運営 ③〕

4 事業

協議会の事業は、規約上では、自然観察会等の普及事業・調査研究・指導方法の開発研究・研修会の開催・印刷物の発行・会員の連絡協調などがあげられていますが、一般的には自然観察会・調査・研修会を3本柱として考えています。

自然観察会は、実質的に各支部が主体となって進めています。このうち県からの受託観察会とシリーズ観察会は、各支部の協力で統一的に実施しています。この他、支部ごとに年間計画を定めて実施していますが、名古屋・尾張・知多・西三河支部では月例観察会の比率が高く、東三河・奥三河支部は支部主催型の観察会を中心に計画しています。また、近年は各種団体からの観察会の依頼も増えています。

調査は、近年行ったブナ科樹木の分布調査が主要なもので、今その報告書を取りまとめていますが、その他にセミの分布調査等短期的なものも行っています。調査事業は、県内の自然の状況を少しでも明らかにすることと自然の仕組みを把握することを目的に進めており、400名の会員の協力があれば相当なことができるはずですが、いつも協力者が少なくて十分な結果が得られていません。今後もいろんな分野の調査研究を行いたいと思っていますが、実施体制を考えて二の足を踏んでいます。また、各種情報の収集にも取り組みたいと思い、順次項目毎に担当者を決めていく予定です。

研修会は、会員の実力を高めるために行っている基礎研修、会員の親睦等を含めた指導員研修及び観察研修に区分して実施しています。御要望の項目があれば、順次行っていく予定です。

その他にも、皆様のご協力があれば、自然の大切さを訴えていくためのいろんな事業を実施したいと考えています。

自然観察会に参加して（2）

事務局から

昨年11月の自然観察指導員講習会に参加して、新しく指導員となられた方に、自然観察会に参加して、その感想を書いていただくようにお願いしたものです。（前号の続き）

＊＊＊＊＊

11/26 関戸渓谷

観察会の案内は、関戸渓谷入口の案内板に、翌月分を原田さんが自分で書かれたと思うものが貼ってあり、基本的にはそのポスターを見た人が参加する。当日も県営ロッジの宿泊客が飛び入りで参加しており、良い案内方法であると感じた。しかし、参加者は私の家族2人と飛び入り参加の家族4人の計6人であった。参加者がないこともあるが、欠かさず実施とのことで敬服した。

渓谷の入口から、渓谷に沿って登りながら、道の両側の植物の名前や特徴を教えてもらう。また、地元の方で地域の昔のことによく知つてみえ、大変興味深い話をうかがえた。特に、このあたりは。明治30年頃は牧場が多く、草原の山であったが、その後村の財政策から植林が活発となり、現在の森となつたとのこと。そのため、周囲を見ると植林しにくそうな地形の所が天然林となつていて興味深い。当日の観察会のテーマは、「どんぐりひろい」で6ページほどのブナ科植物の資料も配布された。11月も末のため、花は少なかったが、カヤラン・マンサクなどの春のみどころを教えてもらった。また、エンシュウハグマとキッコウハグマの境がこのあたりにあるとのこと

であった。

◎感想：今まで何度も観光で行った所であったが、全く違つた目で見ることができた。観光地であつても、細かく見れば人の手が入っていない所に多くの自然が残つていると感じた。

また、原田さんのように身近な自然と長く付き合える様な活動も良いと思った。原田らたさんは、同時に県からの植物調査も行つておられ、観察会が長く続く良い方法であるとも思った。地域ごとに小集団活動で観察会を進めていけないものだろうか。

＊＊＊＊＊

2/4 森林公園

当日は立春。穏やかな陽ざさしながら気温は低く、噴水池は完全凍結状態です。集まつてくる人たちの話題も今朝の冷え込みのこと。

リーダーの鬼頭さんから本日の観察ポイントが紹介されました。①池にいる水鳥で淡水鴨と海水鴨の潜水の違い。足のついている位置。②先回、クサギの木に木屑の固まりがあり、コウモリガの抜け出た後だと思われる。③残雪にリスの足跡があるかもしれない。これは、特に観察テーマを持ってこなかつた方にも積極的に参加していただけの点と、先回の観察会からの動きを観る点でいい導入だと思います。

◎2本の木を観る：モンゴリナラとコナラの全体の姿、枝ぶり、葉芽、幹の色、残っている葉

◎糞の話：竹林の中で。盛り土の上にバラバラと黒褐色の固まりを見つける。何の糞かとなつたが、結果はタケノコ用の肥やし

であると話が落ち着く。モグラ説も出て、公園ならではのお粗末でした。

きれいな渦巻き型の群青色の糞を見つける。かつてこの木にアオバトが止まっていたので、その時糞はなかったが、アオバトのエリアになっていると思うとの参加者の情報がある。それにしても芸術的な糞ではあります。

◎ツツジの株を観る：昨年咲いた花の数（種の飛んでしまった殻の数）、今年咲く予定の蕾、花芽と葉芽の大きさ、半落葉の観察をする。

◎ヨコズナサシガメの冬越し：コナラの木のすきまに7、8匹の幼虫が固まっている。背中の赤い点がはっきりしている。4令ほどではないかとのこと。すぐ横に抜けがらと思われるクモのようなものが15個ある。背に抜けた跡がある。このカムムシは5令で成虫のことだが、この寒さの中で脱皮を続けるのだろうか。

◎同じ木だろうか：小さい赤い実がついたままの木が数本ある。果実はドライフルーツよろしく甘くておいしい。他の木も味わってみる。こちらは種が邪魔になる感じでコナシのよう。太い幹は明らかに違うが、枝の部分はみな同じように見える。よく似ているアズキナシではないかということになつたが、詳しい指導員を交えて再び同定作業。果実の色や味は成熟度や乾燥度の違いで、ズミであるとの結論となった。参加者の各々がそれぞれの観点で確かめることができたと思います。花の頃が待ちどうしいものです。

◎ノスリを観た：池にはマガモ・カイツブリ・カワウ・ハシビロガモ・オナガガモ・コガモ・ミコアイサ・ダイサギ・コサギ・アオサギなど手持ちの眼鏡では少々遠い。指導員の一人が林に止まっているノスリを発見。猛禽類というには穏やかな優しい姿でした。さすがに過眼線はりりしい。◎幼

い頃の思い出も材料：コウモリガの抜け出た跡は木屑の色も黒ずんでいるが、脱皮の際の幼虫の皮はきれいに残っている。参加者の一人が恵那地方では薪割りの時に出てくる生きた幼虫を焼いて食べたと言う。私もそうだ。確かゴト虫と称してカミキリの幼虫なども食べた。甘くておいしいものだったと記憶している。

2/11 大高緑地

時間を持て余している連れ合いを誘って参加する。世話役の山田指導員よりの本日のテーマのお話から始まりました。既に活躍されている指導員の自己紹介のあと観察をしながら作業目的の場所へ移動する。

◎巣箱を架ける：雑木林の中、日当りのよい所。どのように注意したらよいか目の当たりに教えてもらう。巣は架ける木にこだわらないのだろうか、クスノキの枝陰やマツなどは。

◎潜伏芽（サクラの幹）：幹の中に埋もれていた芽が幹から枝として不自然に出てくる。上部が枯れた時の生き残りの知恵。

◎イチョウは針葉樹？：実のなる木は枝が横に広がっているが、雄木は縦にまとまって伸びている。雄木の若い時の葉は切れ目が深く入っているが、古くなると見分けられなくなる。植物の中で唯一精子を作る変わり者で、葉脈が放射状に広がっているのは松葉を寄せ集めたような形。

◎散らない落葉樹：葉を落とす木は枝を痛めないように葉のつけねに離層を形成するが、コナラの若い木はその力が小さいので葉をうまく落とせない。

◎ネジキの花はいつねじる：ネジキの花は下向きに咲いているのだが、実になったものは上を向いている。その訳は？

◎マツの保身術：元気のいいマツは、ヤニを出しているので害虫や雑菌は入り込めない。酸性雨などで樹勢が弱るとマツヤニが出なくなり、マダラカミキリなどが産卵す

る。マツは雑菌を持っているので瘦せ地でも根が守られて生長する。土壤が肥えてくるとマツ自身も変遷の道をたどる。

◎鳥がない！：昨年たくさん観られた水鳥がいません。池の水は台風よけに落とされて以来からっぽとのことです。そもそも台風の都度落とさねばならないのは造成地の池として調整機能が不十分。そのため、水鳥も山鳥も見られない今年の冬である。連れ合いは、双眼鏡まで持ってきたのにと残念頻りです。

✿✿✿✿✿

自然環境がいかに重要なことかいまさら申し述べるまでもありません。その自然のことを少しでも勉強し、知識を得たいと思っている今日この頃です。自然の大切さを多くの方々に伝えるのは、私にとってまだまだ時間がかかりそうです。

11/19 滝頭公園

◎感想：場所がら自転車で参加する方が多く、一般の方にもよくわかるような集合場所（駐車場）案内がいるのではないかと思われます。

◎懇親会：観察会の後の“いも煮の会”に参加させていただきました。温かい鍋を囲んで賑やかでした。野趣味があり、食欲をそそるものでした。鈴木友之さんにいろいろご説明いただき大変勉強になりました。

1/15 基礎研修会「愛知の土地利用」

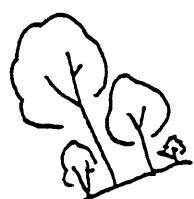
平成元年12月に制定された「土地利用基本法」の運用に携わってみえた県の宮崎主査の話は大変勉強になりました。また、多くの貴重な資料をいただき、これも4～5年は使用できるものと思っています。参加者11名。土地利用の問題は関心があり、また年初めでもあるので多くの方が参加されるものと思っていましたが残念でした。

✿✿✿✿✿

大高緑地 11/2, 12/10, 1/14, 2/11

第2日曜日は天気に恵まれ、4回目の観察会も無事に終わりました。以前と変わったことと言えば、最初に指導員として紹介されること、参加者の方から時々質問されるようになったことくらいでしょうか。でも、自分自身の中では、いつももっと勉強しなければという気持ちばかり先走って、何も身についていないような気がしてなりません。自分は今一体何を一番知りたいのか、何を一番したいのか、そのところをはっきりさせたいなと思っています。そんなことを考えるよりも、とにかく色々なものを見たり読んだりしてごらんという声が聞こえてくるような気がします。確かにそれも一つの方法だと思います。でも、理想としては、これだけは自信が持てる、という何かを見つけたいなと思っています。

今年は、新聞報道にもあったように、鳥をみかけることがとても少ない年だと思います。大高緑地の池には、水がほとんどなく、鴨の姿はほとんどありません。ツグミも私自身は、今年になって一度も見ていません。寒波の影響なのか、水不足の影響なのか、いつもの年に見られるものが見られないということは、とてもさみしい気がします。もし、これが知らず知らずのうちに人間がそうさせているのなら、大変なことだと思います。そんな変化を感じ取るためにも、月1回のこの観察会を続けていきたいと思っています。



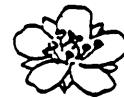
行 事 内

☆基礎研修会「ゴミ問題を考える」(室内)

期日：平成8年7月7日(日) 13:30～16:00

場所：中小企業センター(名古屋駅前)

講師：県担当者



☆視察研修会「梅池湿原」

期日：平成8年8月10～11日(土日)

場所：長野県白馬村梅池湿原・大町周辺の湿原

地下鉄本郷駅10時集合(予定) 乗用車に乗合させて現地へ。翌日夕方帰宅予定。

※宿泊を伴いますのでなるべく早く申し込んでください。

☆基礎研修会「水生植物の観察」(野外)

期日：平成8年9月1日(日) 10:00～昼

場所：志段味地区 (集合：名鉄瀬戸線尾張旭駅)

講師：東 義巳

★問合せ先：いづれも佐藤(☎05617-3-5674)まで

編集後記

今年は平年並みに梅雨入り(6月上旬後半)になったようです。これから気温が上がり、湿度も高くなると、うっとおしい時期を迎えますが、慢性的になった水不足も心配です。

今月は、西三河支部の岡田さんから植物のスケッチを送っていただきましたので、各所に掲載させていただきました。

皆様の原稿をお待ちしています。(近藤)



＝ 目 次 ＝

御池岳逍遙	1
いじめに対する提言	5
定期観察会	7
森林公園観察会	
大高緑地自然観察会	
岩倉市自然生態園—その後のトンボ池	9
会員紹介	10
近藤記巳子、岡田慶範、中井康夫	
支部だより	12
(尾張、名古屋、奥三河)	
事務局から	14
自然観察会に参加して(2)	16

(訂正) 前号表紙絵の「ホウノキ」は、「オニグルミ」の誤りでした。